

■ J I P A北陸大会



大会出席者の集合写真

隔年で行われる、地域協会運営による、JIPA大会、今年20年度は北陸IP協会の運営にて金沢で行われました。

大会会場は、金沢市民芸術村パフォーミングスクエアにて開催。出席者は70名を越え、いつになく盛大でした。初めに中川JIPA会長の挨拶と活動の報告がなされ、村上北陸IP協会会長、及び元北陸IP協会会長新村氏から今回の北陸大会の内容とスケジュールの説明などを行いました。

その後、ご来賓の建築技術教育普及センター、武田様よりお言葉をいただき、記念講演と移りました。この金沢に古くからある金箔工芸について(株)箔一社長、浅野氏が、京都からこの金沢に移り来て根を下ろし、伝統技術を継承してゆく、というご自身の活動をもとに、ここしばらくの流れ、状況を分かり易く話された。

そして、兼六園と金沢城趾へと足を伸ばして、見事この日を待っていたかの様に満開の桜を鑑賞し、親睦会会場へ移動した。

親睦会は大会が昼間の為出られなかった地元の方も加わり、80名ほどとなり、ますます熱気も上がりました。協会構成の福井・石川・富山3県の名物を意識した料理に酒、全国から集まった皆さんも、色々な方々との親睦とともに大いに楽しみました。

翌日は協会構成の3県の見学会コースが、それぞれの県の方が案内役になり、金沢市内3コース、五箇山コース、永平寺・和紙の里コースと全5コース用意されていました。全国から集まった皆さんがそれぞれのコースに別れて、春の北陸を楽しみ、見聞を広める良い機会としました。

私は永平寺・和紙の里コースに参加しました。和紙の里へ行く前に立ち寄った、紙祖神 岡太(おかもと)神社、大滝神社(国の重要文化財に指定された日本一複雑な屋根を持つ社)の見学と、2.4m×4mほどの最大級の和紙を漉くという、岩野平三郎製紙所を休日にもかかわらず、開けていただき見学できたことが収穫でした。そして、岡太神社へゆくまえに通った桜並木で、バス同乗のみんなが思わず「おお！」と声を出した、桜吹雪、一瞬前が見えなくなるほどの見事さ、手にカメラを持っていたにもかかわらず、撮ることができないくらい僅かな時間の出来事に感動！目に焼き付いた残像はみんなが上げた歓声と供にもう2度と経験できない美しい思い出となりました。

(広報室 下田 濟二郎 記)



兼六園の桜



親睦会にて



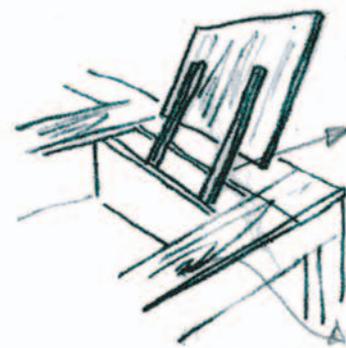
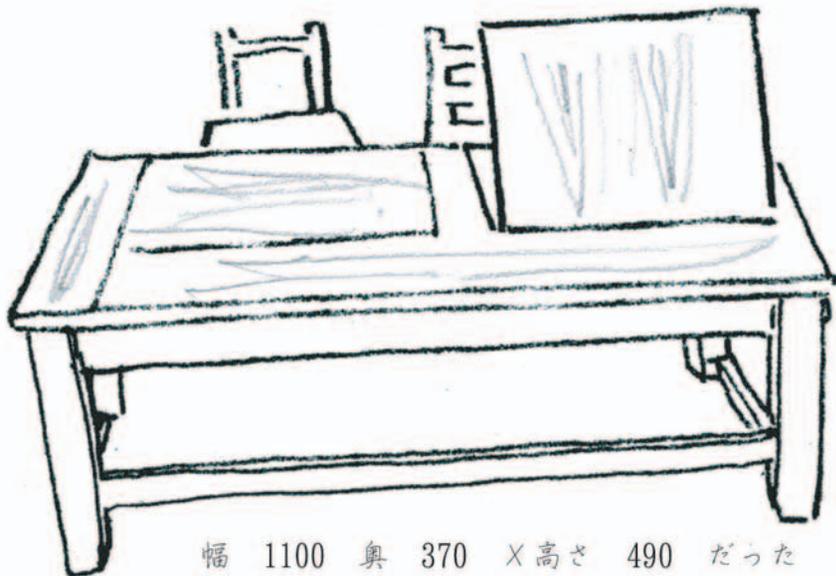
岡太神社の桜皮葺きだから出来た複雑な屋根



最大級の和紙を漉く時に利用された天井クレーンの木製レール

■ 途中下車

特注家具の注文があり打ち合わせにお邪魔した。材料はオークを使ってほしいとの希望で話しているとオークを樫とっておられ、「ナラ材」であることを説明した。ナラはドングリの実を付けると言うと、樫もドングリをつけるぞ！と、樫のどんぐりは、丸い実で、ナラの実は細長いと、話に花がさいた。昔、子供の頃に小学校で使っていた机はオークだったとか、二人掛けで右に視箱がついていた、蓋には棒が二本ついていて、それを向うに起こすと蓋が開いた。いつからパイプの脚の机になったのかと聞かれ、調べてお知らせすることで退出した。



丁番ではなくこのよう
な棒で蓋を開けていた

横の箱にはすずり入れ
がついていた

幅 1100 奥 370 X高さ 490 だった

(注：オークを広辞苑で調べても建築大辞典（彰国社）で調べても同じと出ていた。フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia) では、英語のoak[オーク]という単語(他のヨーロッパ言語も同様)には、常緑性のカシと、落葉性の[ナラ]の区別がない。英語で常緑性のカシのみを指す場合はライブオーク (live oak) と呼ぶ。ヨーロッパにおける常緑性のカシ類の分布は南ヨーロッパに限られており、イギリスをはじめとする中欧・北欧に分布するoakは、日本語では植物学上ナラと呼ばれているものばかりであるが、文学作品などではカシとして翻訳されている例が多い。)

そこで法人会員の(株)ホウトクの安原啓明さんを訪ねた。いつからパイプのデスクになったのか聞くと、「1961(昭和36年)学校用の机と椅子の製造を開始しました。それまでの木製の机は、昭和前期の児童の体格を基に作られたので、児童の体位向上にマッチしなくなり、成長時の健康にマッチするよう、弊社の自転車のパイプ制作のノウハウを生かし、スチール製の学童机/椅子を制作しました。」当時使いやすく軽く丈夫で教室があかるくなったと喜ばれ、JIS規格の見本となった学生机型は、国産第一号である。

学校といえば、2008年10月15日に竣工した西新宿の東京モード学園コクーンタワーは学校としては日本一高層ビルで、地上50階、地下4階、塔屋2階。最高部の高さは約203mで、モード学園・HAL東京(コンピューター総合学園)・医療福祉系の3分野が開校になった。教室数約250教室、1万人の生徒が勉学に励んでいる。

開校にあたり、クリエイティブな感性を育む空間で、デザイン性、座り心地を求められ、試作を繰り返し、全館の講義用机イス6816席をホウトクで制作納入しています。これからも、わが社ホウトクは、未来を担う若者達が、キャンパスに、また美の追求をする空間に、自然に情緒が磨かれるホウトクデザインを追求していきます。



学生机 1 型



■ 知って知らない、。

削ると透明になるのはなぜですか。「ガラスが二重になっているからだ、色ガラスのワクをつくり、内側に透明ガラスを貼り付けるように作るのだ」と江戸切子の伝統工芸士澤倉剛二氏。元祖は薩摩切子でそれを真似て作ったのが江戸切子だそうで、「まだ私は60年ほどしか経っていないので、伝統工芸ではない」と。



伝統工芸師 澤倉剛二氏



江戸切子

そこで薩摩切子を調べることにした。運良くサントリー美術館で「まぼろしの薩摩切子」展をやっていたので、六本木の東京ミッドタウンに出かけた。弘化3年（1846）、薩摩藩主・27代島津斉興（しまづなりおき）が始めた薩摩のガラス産業は、製薬館・医薬館で行われる試験や精錬に使用するガラス器の必要性から、薬瓶などのガラス器が製造されたことにはじまります。そして息子・斉彬（なりあきら）の代に飛躍的な成長を遂げました。幼い頃からヨーロッパの書物に親しみ、一流の蘭学者と交流のあった斉彬は、外国文化も積極的に取り入れました。イギリスの力強い直線やボヘミアの優美な曲線など、その造形にはヨーロッパの影響が多々見られます。1851年には江戸のガラス師の四本亀次郎を呼び寄せ、紅色ガラスの製造を命じ、藍、紫、緑、黄色などの発色に成功しました。その後、1855年には鹿児島市郊外の磯に、大砲を造るための反射炉をはじめ、溶融炉、硝子窯など多くの設備を備えた一大工場群を築きました。これらの工場群はのちに「集成館」と命名され、（集成館でおこなわれた様々な事業を総称して「集成館事業」と呼びました。）ここには百人以上の人々が働く大規模な硝子方を設け、本格的なガラス製造がはじめられ、薩摩切子は急速に美術工芸品として世界の一級品へと成長しました。その影に江戸切子を手本にしていると展示場では説明文がありました。現存する器は、将軍家や大名などに伝来するものも少なくありません。

しかし文久3年（1863）、薩英戦争によってガラス工場が破壊されると、その製造は衰退の一途をたどります。幕末の十数年の間に一気に興隆し、明治初期には制作されなくなり、はかない運命を遂げました。すると冒頭の澤倉氏の話とは違っている。調べると江戸切子は昭和60年に東京伝統工芸品に指定されえている。

伝統工芸の条件とは、1.製造工程の主要部分が手工的であること。2.伝統的な（約100年）技術・技法により製造されること。3.伝統的な原材料を主として使用し製造をしていること。4.都内において4企業以上の者が製造していること。江戸切子はこれらの条件が満たされています。現在東京都知事認定士は18名である。職人さんの口下手と私の勘違いで、澤倉氏は「自分の作品はまだ60年しか経っていないので伝統工芸品ではない」と言われたのだと理解できた。江戸切子は国指定の伝統工芸品として、平成14年1月29日に認定されていました。

さて、江戸切子と薩摩切子の違いは、江戸切子が水晶加工から棒状工具を使用したのに対して、薩摩切子は動力に洋式水車を利用したグラインダーを用いたところにあります。江戸は切れ味が鋭く《江戸っ子だい！》のさっぱり感がある。それに対比して薩摩は“ぼかし”が入ります。このボカシの表現は偶然に生まれたのではなく、ボカシを表現するために色ガラスを厚めに被せ、カットの角度を緩やかな角度にするなど、様々な研究・改良がなされた結果、ようやく生まれたのです。これは、あらゆるものに生命を感じ、四季の移ろいや細やかな感情の変化を、歌に詠み、色に染め衣食住の様々なものに現すことを楽しんできた、日本人だけが持っている感性だと。展示のなかに徳川美術館所蔵の1対のボトルがありました。説明には殿様が篤姫に贈ったであろうと記されている逸品（藍色被栓付瓶1対）を見ました。オーラのような柔らかでしっとりとした輝きを放ち、見るほどに味わいが深まります。こんなとき日本人に生まれてよかったと、薩摩焼酎をロックグラスで、いにしえの職人達に乾杯。



薩摩切子 ぼかし



篤姫 ボトル

■ 理事会トピックス

【評議員会】

第15回通常総会議案書の内容を確認し承認されました。

【理事会】

平成21年5月度入退会者（社）の報告がなされました。

【総務委員会】

事務局強化計画・ライブラリー化計画の必要性が報告されました。

【事業委員会】

7月17日、東京国立博物館にてセミナーを開催する旨報告されました。

テーマ：（仮称）作品の息吹を感じる「展示デザイン」

講師：東京国立博物館 デザイン室長 木下史青氏

【情報委員会】

総会前までに英語版ホームページが公開されること報告されました。

【会員交流委員会】

会員交流ツアー計画の中間報告がなされました。

【教育普及委員会】

IP受験セミナー開催日程について報告されました。

IP受験セミナーのポスター制作についての経過を報告されました。

【法人会員の会】

第30回インフォメーションの会開催報告がなされ正会員の

積極的な参加を呼びかけました。

セミナー「IPって何？どんな仕事をしているの？」第3弾を開催（理事会当日）

【広報室】

東京インテリアプランナー協会の英語表記について改めて提起されました。

【JIPA】

JIPA全国大会が石川県で開催されました。

来年は奈良県開催である計画が報告されました。

■ 編集後記

エミールガレの照明スタンドを買ったのでそれを飾る棚をデザインしてほしいと依頼があった。1500万もするそうでデザインを頑張ったのだが、こちらは値切られた。伺ったとき江戸切子のガラスがあったので“まぼろしの薩摩切子”の話をしたら、現在数点程しかない本当の三つ重ねの薩摩切子を見せられ、感激より唾然とさせられた。

情報委員会ニュースレター担当 井上常雄